エッセー

2000 年 ― 立教大学「国際化」元年

異文化コミュニケーション学部教授　カプリオ マーク

私は 1996 年４月、桜の花びらが舞い散る頃に、立教大学に着任しました。その時のキャンパスはとても趣きがありました。大正時代の赤煉瓦の建物があり、キャンパスの西側には校宅と呼ばれる白い小ぶりな住宅が並んでいました。その校宅は事務局などに使われていましたが、かつては外国人の教授が住んでいたそうです。

国際センターはキャンパスの東の外れ、工事現場で見かけるような安普請で古ぼけたバラックのような建物の中にありました。その後、キャンパスの風景は劇的に変化しました。赤煉瓦の建物はそのまま残されましたが、反対側にあった白い小住宅は、太刀川記念館、学院事務棟、そして最後に１４号館というように、次々と出現した現代的な建物に取って代わられてしまいました。

キャンパス内の道は今と同様に狭くて、アジア系の学生が多く見かけられました。「金髪」の学生かと思ったら、ヤンキーな日本人学生でした。つまり、欧米からの留学生はほとんど見られなかったのです。

2000 年５月の時点では、立教大学の協定校はアジアに１０、ヨーロッパに８、北アメリカに８、オーストラリアに１、合わせて２７大学でした。アメリカで有名なコーネル大学とシカゴ大学とも協定がありましたが、学生交換は少なかったようです。なぜならそれらの大学へ行くためには高い英語力と、交換制度でなかったために高い学費も払わなければならなかったからです。両大学の大学院生が博士論文執筆のために立教大学で学ぼうと留学してくることはありました。また、立教大学の教員が研究休暇に両大学に滞在したこともありました。

交換留学制度が不活発だった理由の一つは留学生数の不均衡でした。協定関係の基本は、ほぼ同数の学生を交換することでしたが、実際の交換学生数は立教からの派遣留学生が５５人（そのうち２８人は交換学生ではなく、英語を学ぶためにケント州立大学へ私費留学する学生でした）であった一方、相手校からの受け入れ留学生は３２人でした（そのうち１８人はアジア人でした）。とくに人気があったアメリカの大学との不均衡問題は、学費の相互免除の観点から無視できない問題になりました。

もう一つの問題は、バブル経済が終わったことによって留学生にとって魅力のひとつだった日本経済の勉強が色あせたことでした。難しい日本語をマスターしてまで留学を目指す学生はほとんどいなくなりました。このころヨーロッパ諸国は留学生のために英語によるコースを設けるようになっていました。経済的魅力を失った日本でも、主要な大学は英語による日本研究、アジア研究のコース開設に向かって動いていました。しかし、立教大学ではそうした動きはなく、その結果、欧米からの留学生がほぼ皆無になっ

ていたのでした。

さて、タイトルにあるように、2000 年を立教大学「国際化」元年とした大きな理由は、2000 年 4 月に法学部の五十嵐暁郎教授（現在名誉教授）が国際センター長に就任した時から、立教大学の国際交流が大きく動いたからです。彼はまもなく立教大学の国際交流の危機的な状況を理解しました。このままでは数年後に立教の国際交流は破滅的な状況になるだろうと考えました。当時、立教では英語教育 (ESL) 以外に英語による科目は一つもなかったのです。日本語のレベルが低い留学生のための日本語学習コースもありませんでした。

立教の学生は英語圏の大学へ留学するためには高い英語力を身に付けなければなりません。行き先の大学では英語で行う授業しかないからです。その意味では不公平ですが、結果的に交換留学生数のバランスは悪化しました。とくに日本人に人気のあるアメリカの大学はこのバランスに厳しく、協定関係は危機に陥ります（実際にワシントンアンドリー大学とケニヨン大学はまもなく立教との協定を解約しました）。

五十嵐元国際センター長が提案した改革案は英語による科目と新しい日本語プログラムの開設でした。この英語による科目の開設のために五十嵐元国際センター長は私を国際センター副センター長に選任しました。こうした科目の開設のために、私たちは日本史、日本社会、日本の政治・経済、日本の中のアジアの 4 科目を企画しました。クラスサイズを最大 30 人（立教生と交換留学生を半分半分）に制限し、5 限（当時は 16:30—18:00）に設定しました。これは授業後に学生たちが一緒に食事などをすることにより、コミュニケーションが生まれると考えたからです。

このプログラムは交換留学生と立教生の双方に歓迎されました。数年後には 5 つ目の科目、「東京スタディーズ」を追加しました。この授業の担当者は私でした。授業の三分の一は講義の内容に合わせた東京市内ツアーを行いました。

日本語教育を改善するために数年後に池田伸子教授が赴任されました。新プログラムでは「コンニチワ」コースから上級コースの学生向けの授業まで用意したので、海外の大学や留学生にとっては魅力的でした。さらにこの頃鳥飼玖美子教授（現在名誉教授）の紹介のおかげで、フリーマン財団から米国の大学生のための条件の良い奨学金が提供されました。

2000 年を立教大学「国際化」の元年としたもう一つの理由は、その年の 11 月のアメリカ行きでした。当時国際センター課長だった斉藤喜美子さんが立てたスケジュールによって、五十嵐元国際センター長と私はプログラムの改革をアメリカの大学に紹介するためのハードな出張を敢行したのです。私たちは飛行機とレンタカーを乗り継いで、アメリカの東西南北、6 つの州をほぼ一週間で訪れました。移動距離は約 22,360 キロ！7 大学の担当者に会って、新科目、新しい奨学金などを紹介しました。このとき開設した英語科目と改善された日本語プログラムは、将来にわたって協定校にアピールするものとなりました。

現在、立教大学の国際センターは大学の最新の建物の 1 つであるマキムホールにあ

ります。スタッフとスペースが拡大され、協定校として契約を結んだ学校は 43 の国と地域、259 大学にのぼります。これは立教大学としてだけではなく、学部・研究科レベルでも海外大学と協定を結んだ成果です。英語による授業は各学部にあり、異文化コミュニケーション学部では DLP（Dual Language Program）をはじめ、英語で学位を取れる学部やプログラムとして GLAP（Global Liberal Arts Program）や PEACE プログラムなどが追加されました。経営学部国際経営学科の英語による授業は国際的にも評価されたものとなっています。

しかし、これらの動きはほぼ 20 年前の立教大学「国際化」元年に大学の国際的なイメージを拡大するためのビションによってスタートしました。2000 年からのさまざまな活動が、立教大学を多文化的な大学に育て上げたと思います。立教大学のキャンパスには金髪の頭の日本人は今でもいますが、髪の色だけでは区別がつかないほどの多くの国や地域からの学生を当たり前に見かけるようになりました。私は立教大学で２６年間働いてきましたが、この間で一番自慢したいことを挙げるならば、大学の国際化に少しだけでも貢献できたことでした。

カプリオ　マーク